好評だった文化祭

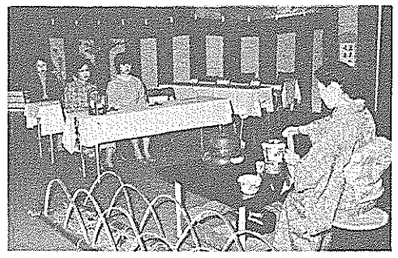
8日間に約1500人が訪れる

市民が直接参加する文化活動を創造しようと、昭和四十九年八月に産声をあげた『南国市文化推進協議会（島村辰彦会長、会員五百七十九人）』――恒例の第九回文化祭が、十月二十四日から三十一日までの八日間市民体育館で開かれ、約千五百人が観賞に訪れにぎわいました。

会場は、日頃の文化活動の発表の場にふさわしく、美術部門（書道、絵画、生花など十二）に三百六十六点の力作を展示。一方、芸術部門（剣詩舞、日本舞踊、大正琴など七）には三十日、三十一日の二日間で約百人が出演し、訪れた人々を楽しませてくれました。

今年は美術部門に、盆栽、俳句・短歌が加わり、〝文化活動の輪〟をさらに広めた苦心もうかがえ、また例年好評の「お茶席」では、抹茶を味わう市民も多くみられるなど、「手造りの文化祭」を盛り上げていました。

今年初めて「盆栽」も出品、みごとな菊の大輪



お茶席も人気があった

おじいちゃん おばあちゃん大ハッスル

ゲートボール大会

今や、お年寄りの間で大ブーム＝ゲートボール。市内の各老人クラブにも普及し、早朝から練習しているお年寄りの元気な姿を良く見かけます。

こんなに普及したゲートボールの競技会を市内でもと、十月二十九日、鵜ヶ池中学校跡地グランドで、各地区から二十四チームが参加して第一回ゲートボール大会が行われました。

日ごろの練習の成果か、なかなか上手な人も多く、スティックをかざして方向を定める姿は、プロゴルファーなみ。優勝したチームなどは、県下でもAクラスに入る実力ということです。しかし、まだルールもはっきり知らず、監督の指示にウロウロする楽しいチームも多くありました。

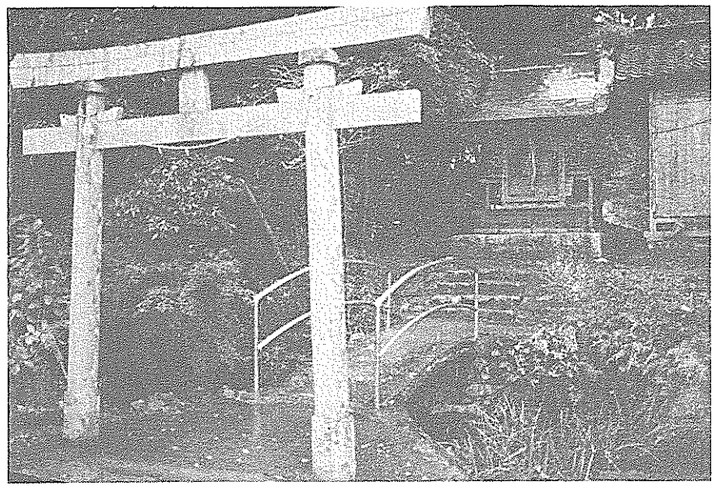
この日は、あいにくの曇り空でしたが、おじいちゃん、おばあちゃんのハッスルプレーに、歓声と笑いが一日中響いていました。

なお、結果は次のとおりです。

マ一位＝田村チーム　二位＝下唐内Bチーム　三位＝下唐内Aチーム　四位＝篠原Bチーム。

文化財をたずねて⑰

《河泊（かはく）神社》



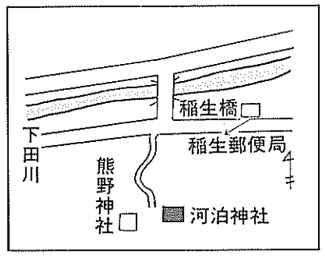
河童祭りがにぎやかに行われる河泊神社

ある日のこと、下田の百姓が、下田川へ馬を乗り入れて、泥を洗っていると、急に馬が跳ね回りだした。何事かと思って後足を見ると、河童が足にしがみつき、必死になって、馬を川中へ引き入れようとする。しかし馬の力が勝っておったのか、とうとう河童は、丘へ跳ね上げられてしまった。

丘へ上がった河童はあわれである。みんなが集まって、けったり、たたいたりしていた。そこへ延福寺の和尚さんが通りかかり、村人から河童をもらいうけ、お寺へつれて帰り、反省するのを待った。

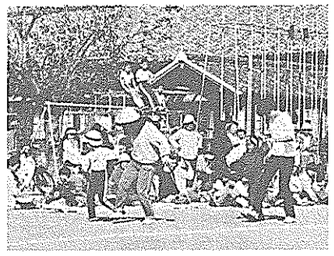
陸に上がった河童は、三日もたつと頭の皿がだんだん乾いて、水が一滴もなくなり、呼吸するのが苦しくなって、とうとう泣きだしてしまった。気の毒に思った和尚さんは、人々に害を及ぼさないことを条件に、放してやった。河童は涙を流して喜び、後を振り返り、振り返り、下田川へ帰って行った。

その後いつの頃か、稲生宮の谷の延福寺の境内に、河童の霊を祭る河泊神社が建てられた。明治のはじめ、延福寺は廃寺となったが、河泊神社は今に残り、毎年六月十五日には、河童祭りが行われている。悪戯好きの河童の霊も、今では安らかに眠っていることだろう。



二人三脚などで お母さんと楽しむ

母子福祉運動会



母子家庭の親子の親ぼくを深め、子どもたちを健やかに育てようこう――と、十一月三日、恒例になった母子福祉運動会が、大篠小グランドで行われました。

快晴の秋空の下、各地区から母子約六十人が集まり、ボールはこびや二人三脚などのゲームに、子どもたちとお母さんは楽しい時を過ごしました。

母子寡（か）婦福祉連合会長の久万富士さんは、「周りの人が考えるより、まず、本人である私たちが頑張らないと幸せにはなりません。参加者が少ないのが悩みですが、これからも参加して良かったと思われる運動会にしてゆきたい。」と、話していました。

昔は戦争や事故により、最近は離婚が多く、母子家庭になる事情も変わってきているようですが、まずお母さんが、力強く生きようと、努力しなければなりません。子どもたちを育てていくために、父親代わりもしなければならないお母さん、未来ある子どものため、特に若いお母さんに頑張って欲しいと思います。